

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名

鄭有植
チョンユシク

インド中期大乘経典の一つに『楞伽經』がある。5世紀頃に成立し、唯識説、如来蔵説ならびに空思想などを説く同経典は、インドにおいては瑜伽行唯識学派や中観学派が依用経典の一つとして重んじた。一方また、中国禅宗史上の多くの論書や語録もまた同経典から多くの文言を引用する。このようにインドと中国の両仏教史において重要な役割を果たした『楞伽經』はしかし、他方でまた、大乘仏教系の複数の教理をおよそ体系的とはいえない構成をもって展開し、後代の付加増広の跡も顕著であることなどから、難解な大乘経典の一つとして知られている。それゆえ、厳密なテキスト校訂や訳注研究はもとより、本格的な思想解明に資する研究もまた乏しいのが実情であった。

本研究は、このような状況下にある『楞伽經』の「アーラヤ識」(蔵識、阿頼耶識)説に焦点をあて、複数の観点からその意味と思想史上の特色を考察する。序論で『楞伽經』の構成と内容、先行研究の批判的検討、本研究の目的と方法を論じたのち、本論において、同経が説くアーラヤ識に関する3つの主要な論題を考察し、経験を保持する潜在意識としてのアーラヤ識の特色を浮き彫りにする。

本研究はまた、以上の考察を進めるために、従来使用されてきた南條文雄校訂のサンスクリット本を、東京大学総合図書館蔵の4写本および龍谷大学蔵の1写本と、チベット語訳ならびに漢訳(3訳)とを照合することによって部分的な訂正を加えた該当箇所テキストと訳注研究を付論として提示する。その上で、本論の第1章は、アーラヤ識が「身体(六感官)」「享受作用(六識)・享受対象(六境)」「場所(器世間)」として顕現するあり方を分析し、第2章は同経のアーラヤ識説としてよく知られる如来蔵との一体説の意味を再考する。そして第3章では、従来未解明であった同経特有の術語「分別事識(事物を分別する識)」とアーラヤ識との関連を詳論する。考察にあたっては、同経における関連箇所の用例を精査するとともに、『中辺分別論』『大乘莊嚴經論』『撰大乘論』『阿毘達磨集論』等の、同経が成立したと推定される5世紀以前の関連論書との比較考察を行いながら説得力のある議論を展開し、いずれの章も従来にない貴重な成果を導いている。

以上のように、本研究は難解で知られる『楞伽經』に正面から向き合い、同経のアーラヤ識説の特色を、経典内の関連箇所を精査するとともに、初期瑜伽行派の関連論書におけるアーラヤ識の意味づけとの比較検討を通して解明し、斬新で興味深い結論を導くことに成功している。今後の『楞伽經』研究に新たな視点と方法を提示したという点においても、本論文はきわめて意義のある業績として評価することができる。一部にやや明快さを欠く論述は見られるが、本研究の画期的な意義を損なうものではない。

以上の理由により、審査委員会は、本論文を博士(文学)の学位を授与するに値する業績であると判断する。